



八戸工業高等専門学校名誉教授
産学交流・キャリア教育支援コーディネータ

佐藤 勝俊 様

「環境・社会報告書2015」を環境省の環境報告ガイドライン（2012年版）と対比しながら、拝読させていただきました。基本的な構成はガイドラインに沿っており、必要な項目は全て網羅されているだけでなく、お客様の声を載せながら使用事例を紹介したり、従業員の声をVOICEとして載せたり、広くステークホルダーの皆様にも分かりやすく伝えようとする工夫された内容になっており、非常に高く評価できます。

主力製品であるフェロニッケル製造工程における省エネ・環境負荷低減の活動、法規制を遵守した一般廃棄物の焼却灰や産業廃棄物、ホタテ貝殻を再資源化するリサイクル事業、さらには副産物として排出される溶融スラグを製品化したエコ商品の開発など、環境に配慮した事業展開をしており、持続可能な社会の実現に向けたこれらの取り組みは、国内外の企業の模範であると言えます。また、これらの事業活動に関する品質管理、環境負荷とその低減対策、さらに労働安全衛生・防災の取り組みを社内外の皆様に分かりやすく伝えるいわゆる「見える化」に積極的に取り組んでいる姿勢に共感致しました。

これらの取り組みがますます充実していくことを期待して、いくつかコメントさせていただきます。

IMSの着実な運用

品質管理、環境管理、労働安全衛生管理の3つのマネジメントシステムを統合したIMSの運用は、業務の効率化はもとより品質の向上、環境負荷低減、労働安全衛生・防災の確保につながり、会議

の開催回数の削減、指示系統の統合等、効率化の効果も出始めているおり、IMSの着実な進展が評価できます。

今後もISO9001、ISO14001、およびOHSAS 18001の認証登録の維持とともに、IMSシステムの継続的な評価、改善、さらには確実なPDCAサイクルの実行を通して、スパイラルアップしていくことを期待します。なお、マネジメントシステムでは、Checkのプロセスが重要です。実施された内部監査では、教育訓練と力量評価に関して多くの指摘があり、必要な力量の明確化が今後の課題とされています。難しい課題ですが、良い点も積極的に取り上げながら改善につなげる活動を継続的に行われることを期待しております。

マテリアルバランス

フェロニッケル製造工程、焼却灰・ホタテ貝殻リサイクル工程に関する記述では、原料や製品、エネルギーや処理用水などのinput、outputを把握するマテリアルバランスの考え方にに基づき、図表が示されており、環境負荷軽減の対策内容が大変分かりやすく示されており、高く評価できます。

IMS目標と達成状況

2014年度のIMS課題に関する方針、目標、実績、達成状況、今後の取り組みさらには掲載ページが表形式で簡潔に記述されており、達成状況がひと目で分かる表示となっております。

この中で、ばいじん量変動要因の調査と変動調

整方法の確立に関しましては、目標が未達成であり、是非達成されることを期待致します。また「国内や海外の関係する法律、規制および当社が同意する要求事項の遵守」の項目ではすべて未達成となっております。今後の取り組みとして具体的な対策が掲げられておりますので、確実な実施が望まれます。

水質汚濁防止活動

電気炉本体の冷却とスラグ冷却に使用する水の総排水量は年間500万m³にも達しています。水質汚濁防止のための排水終末処理施設の運転により排水の協定値超過ゼロを継続していることは評価できます。また処理済み排水の有効利用に取り組んでおられることは新たな取り組みとして、その成果が期待されます。

これまで指摘しました項目の他にも品質管理、環境管理および労働安全衛生・防災の取り組み、さらには社会貢献活動や、地域との連携など、優れた点が多々あります。

積極的に企業活動の情報公開を進め、会社全体として社会・環境活動を継続的に取り組んでいることに敬意を表して、私のコメントとさせていただきます。

第三者意見を受けて



取締役 専務執行役員
(IMS管理責任者)

藤山 環

佐藤勝俊名誉教授におかれましては、お忙しい中を弊社の「環境・社会報告書2015」に第三者意見をご寄稿頂き深く感謝申し上げます。

本報告書より、環境に関することのみならず多様なステークホルダーの皆様当社のご理解を深めていただくべく、報告書名を「環境・社会報告書」としてコーポレートガバナンスやコンプライアンスなどのCSRを見据えた内容も新たに加えて作成致しました。今後ともCSRへ進化・発展していきたいと考えております。

今回は品質・環境・安全衛生の3つのマネジメントシステムを統合したマネジメントシステム（IMS）の本格的な運用を開始した2014年度1年間の実績についても報告しておりますが、佐藤教授のご指摘のようにPDCAのサイクルを回すことの重要性を認識し、特にCHECK機能としての内部監査の有効性を高めるべく、監査員の教育訓練による力量向上に心がけています。

また、目標管理活動についても継続的な改善としてIMSでは重要な部分と位置づけ、IMS方針に基づいて活動しておりますが、達成できなかった目標についてはその原因を明確にし、再発防止はもちろんのこと次年度での達成に努めております。

弊社の「環境・社会報告書」の作成にあたっては読まれる方にできるだけわかりやすく、読みやすいことを作成方針としております。今後とも佐藤教授のお褒めの言葉に満足することなく、より一層「見える化」に努力していきたいと考えております。